

## マイソール出身の学者 M.N.シュリニヴァスの生涯をたどって

仲川 裕里

### はじめに

現代インド社会人類学・社会学の創設者といわれる人びとの中でもひとときわ卓越した存在として知られる M.N.シュリニヴァス (M.N. Srinivas 1916-1999) は、今回、専修大学人文科学研究所南西インド総合研究旅行で訪れた都市のひとつであるマイソールの出身である。

シュリニヴァスの書いた民族誌、著作、論文は、インド国内・国外のインド研究者はもちろんのこと、インド研究者ではない社会人類学者の間でも広く知られ、影響を与えてきている。多くの人が指摘するように (Misra 2007a: 14; Nataraj 2007: 27; Shah 2000a: 102; Singh 2007: 35 など)、インドの詩人・小説家 R.K.ナラヤン (R.K. Narayan) にも喩えられるシュリニヴァスの文体は平明かつ簡潔であり<sup>1</sup>、そこから伝わってくるシュリニヴァスの研究・調査に対する熱意や誠実で謙虚な人柄には私も深い感銘を受けた。しかし、自分の専門領域がインドではないこともあって、シュリニヴァス個人について知っていることは、略歴と民族誌に出てくる自伝的エピソードに留まっていた。今回の総合研究旅行で、シュリニヴァスの出身地であるマイソールを訪問することができたので、この機会にシュリニヴァスの学者としての生涯をたどってみたいと思う。

本題に入る前に、シュリニヴァスの肩書きが社会学者・社会人類学者の両方になっている理由と、出身地であるマイソールと深く関係している彼の名前について、簡単に言及しておきたい。

欧米では人類学 (社会人類学・文化人類学) と社会学は異なる分野として区別される傾向があるが、インドではこの2つの学問分野は明確には区別されず、通常、社会学という名のもとで統合されてきた<sup>2</sup>。そこにはインドに現代社会学・社会人類学を根付かせることに貢献したシュリニヴァスの影響も大きく関わっている。次項で後述するように、シュリニヴァス自身も社会学と社会人類学の両方を学んでいる。さらに、シュリニヴァスはインドの M.S.バローダ大学 (Maharaja Sayajirao University of Baroda) とデリー大学 (University of Delhi) で社会学部の創設に携わったが、どちらの大学においても社会学と社会人類学の有機的な統合を目指し、この

<sup>1</sup> シュリニヴァスはナラヤンの友人であり、また熱烈なファンでもあった (Panini 2007: 111, n.2)。

<sup>2</sup> 日本も、基本的に人類学 (社会人類学・文化人類学) と社会学を異なる学問分野として区別する傾向があるが、社会学部ないし社会学科の中で人類学を学べるようにしている大学も多い。

2つのバランスを考えて、シラバスの作成や教員採用を行なった (Shah 2000a: 96-97)。さらに、シュリニヴァスは、自伝的論文の中で「私は、教育・研究において、社会人類学と社会学を区別することを拒否してきたことを強調したい」と述べ、インドは遅滞した部分と発展した部分が連続している社会であり、そこに社会人類学と社会学という区分を持ち込むのは社会的現実を勝手に改変してしまうことになる、と指摘している (Srinivas 1973: 147)<sup>3</sup>。シュリニヴァスは自分自身について言及するとき、ある時は自分を社会人類学者とし、またある時には自分を社会学者しているが、それは時に応じてこの2つの肩書きを使い分けているということではなく、同じものとして区別なく使っているのである。

次に、シュリニヴァスの名前について、若干説明をしておきたい。シュリニヴァスは、論文や著作では、常に自分の名前を ‘M.N. Srinivas’ と表記しているのだが、彼のフルネームは ‘Mysore Narasimhachar Srinivas’ (マイソール・ナラシンハーチャール・シュリニヴァス) であり、出身地であるマイソールが名前の中に入っている<sup>4</sup>。

インド人の名前の構造は、インドの民族的・社会的・宗教的・地域的多様性を反映していて、複雑であり、名前の表記からだけではどれが個人名でどれが姓(家族名)かわからないのだが<sup>5</sup>、私はそうしたことも寡聞にして知らなかった。インドの名前に関する知識がない者が ‘M.N. Srinivas’ という表記を見れば、‘Srinivas’ が姓(家族名)で ‘M.N.’ が個人名であると推測するのが一般的であり、実際、図書館のインデックスや参考文献の中でも、‘Srinivas’ ないし「シュリニヴァス」が姓(家族名)のような扱われ方をされている。そのため、私も、今回この原稿をまとめるにあたって彼の家族関係に触れた文献を読むまでは、「シュリニヴァス」が彼の姓(家族名)であるとばかり思っていた。

次項でも触れるが、シュリニバスには、彼が進路を決定するにあたって重要な役割を果たした長兄がいる。シュリニヴァスは、自伝的論文のなかで、この長兄のことを、‘eldest brother’ を略して ‘EB’ (Srinivas 1973)、または ‘Parthasarathy’ (パルタサラティ) と呼んでいる (Srinivas 1997: 1)。そのため、私は、この長兄の個人名のひとつが「パルタサラティ」であり、フルネー

<sup>3</sup> 当時は、社会人類学は「未開」地域を研究する学問で、社会学は先進地域を研究する学問であるという認識が一般的であった。

<sup>4</sup> まんなかの「ナラシンハーチャール」はおそらく「ナラシンハ Narasimha」と「アーチャール achar」が繋がったものであり、「ナラシンハ」は「ナラ nara」(人間=男)の身体と「シンハ simha」(獅子)の顔をもったヴィシュヌ (Vishnu) の化身、「アーチャール」はサンスクリットで「行為、品行、道徳」を意味する単語である。また、「シュリニヴァス Srinivas」もサンスクリットの合成語で、「シュリ sri または shri」(ラクシュミー女神、富、繁栄、栄光)の「ニヴァス nivas」(住む場所)を表す。以上については、今回の南西インド総合研究旅行に同行され、本特集号にも執筆されている内藤雅雄氏にご教示いただいた。

<sup>5</sup> 欧米や日本とは異なり、インド人の名前は必ずしも個人名と姓(家族名)だけで構成されているわけではなく、また、タミル人を初めとする一部のインド人には姓(家族名)という概念がないので、「どれが個人名でどれが姓(家族名)か」というような書き方は正確ではない。しかし、シュリニヴァスの名前は個人名と姓(家族名)で構成されているので、便宜上、ここではこのように書いておく。

ムは「パルタサラティ」+「もうひとつの個人名」+「シュリニヴァス」、アルファベットで表記すれば‘P\*. Srinivas’(\*にはもうひとつの個人名のイニシャルが入る)になるのだと思い込んでいた。

ところが、この原稿をまとめるために読んだシュリニヴァスの追悼論文集 (Misra et al. eds. 2007) のなかに、シュリニヴァスの家族について触れている論文があり、そこに出てきた長兄のフルネームは‘M.N. Parthasarathy’であった (Nataraj 2007: 26)。また、シュリニヴァスには、この追悼論文集にも寄稿している社会学者の甥がいて、彼の名が‘M.N. Panini’であることもわかった (Misra 2007a: 17)。そこでようやく、私がこれまで個人名だと思っていた‘M.N.’の部分がいわゆる姓 (家族名) であり、姓 (家族名) だと思っていた‘Srinivas’が個人名だったと気がついた次第である。先祖代々のゆかりの地の名前が姓 (家族名) に使われるというのは、インドに限らずよくあることなので、もっと早く気がついてもよさそうなのだが、シュリニヴァスの場合、後述のように、マイソールに住むようになったのは彼から数えて3、4代前の先祖の代からであったため、そして、何といても「シュリニヴァス」が姓 (家族名) であるという思い込みがあまりに強かったため、そこには思い至らなかった。

前置きが長くなってしまったが、次項で本題のシュリニヴァスの学者としての生涯をたどっていくことにする。

## M.N.シュリニヴァスの生涯

シュリニヴァスは、晩年、自伝の執筆に積極的に取り組んでいたのだが (Madan 2001: 120)、1999年11月30日、急性肺炎のため83歳で死去した時、まだその自伝は完成していなかった。しかし、学者としての彼の生涯をたどるのはそれほど困難なことではない。シュリニヴァスは自伝的論文を多く残しているし (Srinivas 1973, 1995, 1997, 2002[1981], 2002[1983])、1976年に出版された『忘れ得ぬ村 (*The Remembered Village*)』は「民族誌的でもあるが自伝的でもある」 (Jain 2007: 79) と評されるほど自伝的要素にあふれた民族誌となっている。また、シュリニヴァスが彼の半生に関して同業者から受けたインタビューも記録され、残されている (Fuller 1999; Deshpande 2000; Shah 2000b など)。さらに、シュリニヴァスの存命中にも彼の経歴や業績に関する論文集が出版されているし (Shah et al. eds. 1996)、死後には追悼論文集 (Misra et al. eds. 2007) が出され、そのなかには評伝的論文も多く含まれている。

シュリニヴァスの学問的業績にまで立ち入って論じることは、インド研究が専門ではない私には手に余るため、本稿では、シュリニヴァスが自身の学者としての人生を包括的に振り返って書いた自伝的論文2本 (Srinivas 1973, 1997) に主として基づき、シュリニヴァスの学者とし

での生涯を簡単にたどりながら、そのなかで私が個人的に関心を持ったエピソードについて、少し詳しく言及していくことにする。

シュリニヴァスは 1916 年に南インドのマイソール市の伝統的なブラーミン<sup>6</sup> の家庭に生まれた。現在、南インドのカルナータカ州において、州都バンガロールに次ぐ第 2 の都市であるマイソール市は、当時はマイソール藩王国の首都として栄えていた<sup>7</sup>。シュリニヴァスの家庭がマイソール藩王国内の農村からマイソール市に移ってきたのは彼の父の代からであるが、シュリニヴァスの家系はもともとはマイソール藩王国の出身ではない。シュリニヴァスの 3~4 世代前の先祖が隣接するタミルナドゥからマイソール藩王国南部の農村に移り住み、そこで農地を保有する地主となったのである。しかし、シュリニヴァスの父は、子どもの教育のために、自分が生まれ育った村を出て、不在地主としてマイソール市に住むことにした<sup>8</sup>。シュリニヴァスによると、マイソール市への移住が行なわれたのは第一次世界大戦が勃発する前のことだったので、シュリニヴァスが生まれる数年前に移住したということになる (Srinivas 1976: 5)。



チャームンディーの丘から見たマイソール市街

<sup>6</sup> ただし、僧侶職についているオーソドックスな (vaidika) ブラーミン家庭ではなく、世俗的 (loukika) ブラーミン家庭であった (Srinivas 1976: 33)。

<sup>7</sup> マイソール藩王国は 1947 年のインド独立時にマイソール州としてインドに編入された。その後、マイソール州は 1956 年の国家再編法によって周辺のカンナダ語地域と統合され、1973 年にマイソール州からカルナータカ州に改名された。

<sup>8</sup> シュリニバスの父は、マイソール市の電力部門に職を得たが、収入の大半は村に残してきた土地から得ていた (Srinivas 1976: 5)。

このことからわかるように、シュリニヴァスは長子ではなかった。彼の自伝的論文から、彼には少なくとも二人の兄がいたことがわかる (Srinivas 1973: 138)。特に長兄のバルタサラティは、シュリニヴァスにとって、ほとんど父親のような存在であり、シュリニヴァスの教育や進路に関することは、シュリニヴァスが 20 代後半になるまで、この長兄が決めていた。これはシュリニヴァスの父が 1934 年に他界したためでもあるが、シュリニバスの父は生前から、家族の中で唯一高等教育を受けた長男に<sup>9</sup>、他の子どもたちの教育や仕事に関することやその他の重要な事柄の決定を任せていた。シュリニヴァスの父親自身は限られた教育しか受けていなかったが、自分の子どもたちには、性別に関わらず、大学を修了させることを強く望む教育熱心な父親であった (Srinivas 1973: 129-130)。そのことは、子どもの教育のことを考えて、自分が生まれ育った村からマイソール市へ引越すことを決意したというエピソードからもうかがえる。

シュリニヴァスは、1973 年に *International Social Science Journal* に書いた自伝的論文の中では、自分が社会学者になったのは、青少年期にあまりからだが丈夫でなかったからだと述べている (Srinivas 1973: 129)。一方、1997 年に *Annual Review of Anthropology* に掲載された自伝的論文は、自分が社会人類学者<sup>10</sup> になったのは多分に偶然によるものだ、という一文で始まっている (Srinivas 1997: 1)。しかし、これは、どちらかが真実でどちらかが嘘ということではない。シュリニヴァスが社会学者・社会人類学者としての道を歩き始めたのは、この 2 つの事実の組み合わせによる。また、そこには、前述のように、長兄の存在が大きく影響している。

大学に入学する前のシュリニヴァスは慢性的なマラリアに苦しんでおり、極度に痩せていた。そのため、親戚や知人の多くは、彼には、医学や工学のような厳しい勉強が要求されるコースに進むのは難しいだろうと考えていた。1931 年の中等学校修了試験 (Secondary School Leaving Certificate Examination) において、シュリニヴァスはかなりよい成績を修めたため、化学や植物学や動物学などを履修する 2 年間の理科系のコースに進学することが可能であった。2 年間の理科系のコースを修了すれば、医学部へ進む道も開かれているため、このコースを選ぶ学生は多かった。親戚や友人のなかには、シュリニヴァスもそうするようにと勧める者もいた。しかし、彼の長兄はそれに反対して、彼に近代史や論理学、数学を履修するよう説き、シュリニヴァスはそれにしがった。理科系の科目を選択したならば、マイソール市の家族のもとを離れて、バンガロールにある大学に行かなくてはならなかったのだが、そうはしなかったのも、シュリニヴァスは大学の学部を修了するまでマイソール市で家族とともに暮らすことができた

<sup>9</sup> シュリニヴァスの長兄は英文学の修士号をもち、マイソールのマハラジャ高校の教師だった。後には、マイソール大学で英語を教えている (Srinivas 1973: 130)。

<sup>10</sup> 前述のように、シュリニヴァスは自分自身について言及するときに、社会学者と社会人類学者を区別することなく用いている。

(Srinivas 1973: 129)。こうした事情から、長兄がシュリニヴァスの進路を決めるにあたって、彼の健康状況を判断材料のひとつにしたのではないかということは容易に推測できる。

1933年、「中間試験」<sup>11</sup> (intermediate examination) に合格し、3年目からどのコースに進学してBAの学位を得ようか思案していたシュリニヴァスのところに、彼の言葉を借りると、「運命がTLAアーチャーリヤの姿をして介入してきた」(Srinivas 1997: 1)。T.L.A.アーチャーリヤ(T.L.A. Acharya)は、長兄の友人で、マルクス主義のジャーナリストであった。彼は、当時ナーグプル(Nagpur)の新聞社で働いていたのだが、この時、たまたま休暇をとってマイソール市を訪問中だった。長兄がアーチャーリヤに弟はどのコースに進んだらよいか助言を求めたところ、アーチャーリヤは分厚い大学のハンドブックのページを繰り、しばらくして、シュリニヴァスに社会哲学のオナーズ・コース(Honors course)<sup>12</sup>を取るよう勧めた。理由は、それが「人間的」(‘humanizing’)だから、ということだった(Srinivas 1997: 1-2)。

社会哲学のオナーズ・コースは経済学や歴史学と比べると人気がなく、シュリニヴァスの志願は特に問題なく認められた。コースは主専攻と副専攻に分かれており、前者には宗教哲学、比較宗教学、倫理学、倫理学史、政治哲学、政治哲学史、社会学、インド社会制度、インド(ヒンドゥ)倫理学、インド(ヒンドゥ)歴史理論など、後者には英語と第二外国語、社会心理学、社会人類学、比較政治学、インド経済学などが含まれていた。マイソール大学で社会哲学のオナーズ・コースに進んだとき、シュリニヴァスはまだ16歳であり、彼はこうした科目を十分に咀嚼するには自分はまだ未熟だった、と振り返っている。また、シュリニヴァスは、当時の自分は勤勉な学生ではあったが、試験は苦手だったと述べている。実際、彼の最終試験の成績は優等ではなく二等であった(Srinivas 1997: 2)。しかし、このコースで教えを受けたワーディアー(A.R.Wadia)との関係は良好だった。後年、シュリニヴァスはバローダ大学に創設される社会学部の教授として赴任することになるのだが、この時シュリニヴァスに声をかけたのは当時バローダ大学の副総長補佐(pro-vice chancellor)<sup>13</sup>だったワーディアーであった(Srinivas 1973: 144)。

シュリニヴァスは卒業後の進路として、漠然とボンベイ大学<sup>14</sup> (University of Bombay) のG.S. グリエ(G.S. Ghurye)の下で大学院生として社会学を学ぶことを考えていたが、役人になると

<sup>11</sup> これは学期の半ばに受けるいわゆる中間試験ではなく、大学2年目の修了時に行なわれる試験で、その結果によって、3年目に進学できるかどうか、どのコースに進学できるかが決定される。

<sup>12</sup> 当時のマイソール大学には、パス・コース(Pass course)とオナーズ・コース(Honors course)という2つのBAコースがあった。前者は最短でBAの学位を得ることを望む、多くの学生のための2年間のコースであり、後者は特定の科目を専門的に研究することを望む、選ばれた少数の学生のための3年間のコースであった(Srinivas 1973: 131)。

<sup>13</sup> 総長(chancellor)は名誉職なので、副総長(vice chancellor)が大学の実質的な最高責任者である。

<sup>14</sup> 現在はムンバイ大学(University of Mumbai)となっている。

いう選択肢もないわけではなかった。彼が BA のオナーズ・コースを卒業した 1936 年、マイソール政府は、政府役人のポストに 2 名の空きが出たため採用試験を行なうという公示を出していたのである。しかし、シュリニヴァスは、最終試験で優等が取れなかった自分には採用の見込みはないと考えていたため、そしてまた、苦手な試験勉強には嫌気がさしていたため、役人採用試験を受けることに乗り気ではなかった。シュリニヴァスの進路について強い決定権をもつ長兄も、シュリニヴァスが役人になることには反対だった。そこで、長兄は、シュリニヴァスにボンベイ大学の社会学の MA コースに進み、加えて夜間に法学を学ぼう勧め、シュリニヴァスは喜んでそれを受け入れた (Srinivas 1973: 134; 1997: 2)。

ボンベイ大学 USES (University School of Economics and Sociology) の MA コースに進んだシュリニヴァスは、希望通りグリエの指導を受けることになった。グリエはシュリニヴァスに筆記試験を受けて取得する修士号ではなく、修士論文を書いて取得する修士号を取るよう勧めた。シュリニヴァスは、自分は筆記試験より論文を書くほうが得意だと思っていたため、喜んでそれにしたがった (Srinivas 1997: 3)。

ボンベイ大学初学年度の 1936 年から 1937 年にかけて、シュリニヴァスは社会学よりも第一次司法試験の勉強に力を注いだ。1937 年 5 月に第一次司法試験に合格した後は、修士論文を完成させることに専念した (Srinivas 1997: 3)。1938 年 9 月に提出された修士論文は、マイソール藩王国の諸カーストの家族関係や婚姻関係に関するもので、主として文献調査に基づくものであったが、短期のインタビュー調査によって得られた情報も含むものであった (Srinivas 1973: 136)。指導教授のグリエは 300 ページにわたるこの修士論文は博士論文にも値するものと考え、本として出版することを強く勧めた。その結果、シュリニヴァスの修士論文は 1942 年に『マイソールにおける結婚と家族 (*Marriage and Family in Mysore*)』という題で出版された。この本の評判は良好で、権威ある総合学術誌『ネイチャー (*Nature*)』にも好意的な書評 (Neville-Rolfe 1942: 505) が掲載され、グリエを喜ばせたが (Srinivas 1997: 4)、シュリニヴァス自身は、後に、この本は未熟なもので、文体もぞんざいであり、1950 年代に絶版になったのは幸いだったと述べている (Srinivas 1973: 134)。

1939 年 10 月、最終司法試験に合格した後、シュリニヴァスは博士論文のテーマについて考え始めた。グリエは、マイソール藩王国の南西に隣接するクールグ (Coorg) 地域の支配的民族集団であるクールグ人に関するフィールドワーク研究をすれば、ボンベイ大学の社会学の研究助成金を出せるのでそうするようにシュリニヴァスに勧め、シュリニヴァスはこれにしたがった (Srinivas 1997: 4)。

1940 年に約 5 ヶ月間にわたって行なわれたクールグ人に関するフィールドワークは、シュリ

ニヴァスにとって満足のいくものではなかった (Misra 2007b: 93)。というのも、フィールドワークを始めてすぐに、彼は原因不明のひどい胃腸障害に襲われたからである。適切な治療法がなく、病気を抱えたままフィールドワークを続行せざるを得なかったシュリニヴァスは、短期の訪問を重ねることによってデータを集めるしかなかった (Srinivas 1973: 138)。

シュリニヴァスの甥で社会学者のパーニニ (M.N. Panini) は、生前、学者としての自身の経験について言及することが多かったシュリニヴァスが、クールグのフィールドワークに関してはあまり触れなかったことを指摘し、シュリニヴァスはこのフィールドワークのやり方を好んでいなかったのではないかと推測している (Panini 2007: 104)。さらに、パーニニによると、シュリニヴァスはクールグの滞在それ自体も楽しんではいなかったという。クールグ地域の丘の連なる美しい景観にも涼しい気候にも、シュリニヴァスはあまり魅力を感じなかった。シュリニヴァスは、ひっきりなしに降る雨、憂鬱な曇天、点在する人気のまばらな村々のせいで、フィールドワークを楽しむことはできなかった、とパーニニに言っていたことがあるという。シュリニヴァスは、陽光と青空があり、涼風にココナツの葉がそよぐマイソールが恋しかったと語り、自分は都市の喧騒が好きで、クールグの丘が与えてくれる孤独や美しさより、人々のなかにいることを好むことを率直に認めていた (Panini 2007: 104-105)。にもかかわらず、シュリニヴァスは、最終的には必要なデータを集めて、1944年の12月に900ページ近い博士論文をボンベイ大学に提出した (Srinivas 1973: 138)。

ボンベイ大学で博士課程を修了したシュリニヴァスは、1945年5月、英国オックスフォード大学に留学して社会人類学を学ぶことになった。ボンベイ大学社会学部で講師のポストの空きが2つあり、グリエの勧めを受けて応募したものの、シュリニヴァスは選に漏れてしまったからである。人事の選考委員のひとりであったグリエは選ばれる見込みが高いと言ってシュリニヴァスに応募を勧めたが、グリエの第一の目的は自分のライバルである研究者の学生をその職につかせないということであった。グリエはその目的が達せられるとそれで満足して、別の2名の学生が選ばれることを認め、そのことにシュリニヴァスはショックを受けた (Srinivas 2002[1983]: 691-692)。当時のインドで社会学で職が得られる見込みはもはやまったくなかった。それに加えて、シュリニヴァスはグリエの指導のもとで行なわされている、クールグの神殿の起源を古代エジプトのピラミッドに求めようとする研究にも失望していた。失意のなかで、シュリニヴァスは海外留学を決意し、コロンビア大学とオックスフォード大学に応募したところ、オックスフォード大学からだけ受け入れの返事がきた<sup>15</sup>。留学のための奨学金は得られなかつ

<sup>15</sup> オックスフォード大学の返事は、後で D.Phil. コースに変更することが可能という条件のついた B.Litt. コースへの受け入れを許可するというものだった (Srinivas 1973: 139)。



たが、長兄ともうひとりの兄ゴーパール (Gopal) が、彼のために英国までの旅費と 3, 4 ヶ月分の滞在費を準備してくれることになった (Srinivas 1973: 138-139; 1997: 7; 2002[1983]: 692)。

オックスフォードではラドクリフ＝ブラウン (A.R. Radcliffe=Brown) の指導のもと、ボンベイ大学に提出したクルグ人についての論文を、ラドクリフ＝ブラウンが提唱する構造機能主義の視点から分析しなおして、博士論文として提出することとなった (Srinivas 1997: 9)。1945 年 9 月に、シュリニヴァスのオックスフォードでの学生生活を金銭面で支援してきた兄ゴーパールが肺炎で急逝したため、シュリニヴァスは財政的危機に直面したが、留学生に与えられる奨学金に応募し、首尾よく得ることができたため、当面の金銭面の不安はなくなった (Srinivas 1973: 141)。

指導教授のラドクリフ＝ブラウンが 1946 年にオックスフォード大学を定年退職したため、シュリニヴァスの指導は後任のエヴァンス＝プリチャード (E.E. Evans-Pritchard) に引き継がれた。つまり、シュリニヴァスは、英国社会人類学を代表する 2 人の社会人類学者から指導を受けたわけである。シュリニヴァスは、後に、「R-B (ラドクリフ＝ブラウン) と E-P (エヴァンス＝プリチャード) ほど互いに異なった人はいなかった」と回想している (Srinivas 1997: 11)。シュリニヴァスによれば、エヴァンス＝プリチャードは非常に気さくで、人をくつろがせるために骨惜しみしないのに対して、ラドクリフ＝ブラウンは人見知りで、他者との間に壁を作るタイプであり、超然としてよそよそしい印象を与えた (ibid.)。学術的な面でも、エヴァンス＝プリチャードは、当初はラドクリフ＝ブラウンの構造機能主義を継承発展させていた<sup>16</sup>、次第に構造機能主義に対して批判的になっていった。そして、エヴァンス＝プリチャードは 1950 年に行なったマレット講演 (Maret Lecture) において、社会人類学を自然科学の一分野と考えるラドクリフ＝ブラウンの見解を真っ向から否定し、社会人類学は歴史学的一种であり、人文科学であると主張した (Evans-Pritchard 1962[1950]: 25-26)。シュリニヴァスは、この講演の後、エヴァンス＝プリチャードならびにエヴァンス＝プリチャードに近い人々とラドクリフ＝ブラウンとの間に、学問的な決別があったと述べている (Fuller 1999: 5, n.8)。

この対照的な 2 人の指導教授とシュリニヴァスの関係について、シュリニヴァスは人間としてはエヴァンス＝プリチャードにより親しみを感じ、近い関係にあったが、学問的な影響はラドクリフ＝ブラウンから受けた、と言われることが多い<sup>17</sup>。しかし、パーニニは、そうした

---

<sup>16</sup> エヴァンス＝プリチャードが 1940 年に出版した『ヌア一族 (The Nuer)』(1940) は構造機能主義の古典と言われている。

<sup>17</sup> 例えばジャイン (R.K. Jain) は「シュリニヴァスは、明らかに、同僚 (ママ) であったエヴァンス＝プリチャードよりも、先生であったラドクリフ＝ブラウンから主な影響を受けていたが、彼はエヴァンス＝プリチャードの性質を賛美していた」と述べている (Jain 2007: 82)。また、ベティユ (Andre Beteille) は、シュリニヴァスへのインタビューにおいて、彼がエヴァンス＝プリチャードと近い関係にありながらラドクリフ＝ブラウンを尊敬し続けていたために、困った立場にならなかったか、と尋ねている (Fuller 1999:

見方は、シュリニヴァスの社会学に与えたエヴァンス＝プリチャードの影響を見落とすものと指摘し、「エヴァンス＝プリチャードが人類学研究で用いた参与観察のメソッドにシュリニヴァスは深く感銘した。エヴァンス＝プリチャードの参与観察のやり方は、シュリニヴァスを社会学者としても人間としても変えたときえ言っただろう」と述べている (Panini 2007: 104)。シュリニヴァスがエヴァンス＝プリチャードの指導を受けた後に行なったフィールドワークは、エヴァンス＝プリチャードの参与観察の手法、すなわち、長期間村に滞在して親しい友人関係を構築し、さまざまな事柄について質問するというやり方に強く影響されたものだった (ibid.: 105)。また、シュリニヴァス自身、エヴァンス＝プリチャードの社会人類学に対する見解はこれまでの近代社会人類学ならびにフィールドワークの伝統が築きあげてきたものの価値を損ねるといった副次的作用をもつということに懸念を示してはいるものの、大筋では賛成しており (Srinivas 1973: 143; 1997: 14)、エヴァンス＝プリチャードをその世代で最も優れた人類学者だと語っている (Fuller 1999: 5, n.8)。さらに、シュリニヴァスは、エヴァンス＝プリチャードのアプローチは、理論や概念の真理値 (truth-value) を評価するよりも、その理論や概念がもつ発見的／学習的価値 (heuristic value) を受け入れ、それによって自分が遭遇した現象をどれくらい説明できるかを考える、というものだったと述べているが (Fuller 1999: 5)、このアプローチは、シュリニヴァスの構造機能主義に対する見解や<sup>18</sup>、彼が提唱した「サンスクリット化 Sanskritization」概念<sup>19</sup> の扱い方に強く影響している<sup>20</sup>。いずれにおいても、シュリニヴァ

---

5, n.8)。蛇足になるが、それに対してシュリニヴァスは「なりました。でも、少しだけです。E-Pは自分が好きな人に対してたいへん寛大になれる人でしたから」と答え、1952年に彼の博士論文が本として出版されるにあたり、エヴァンス＝プリチャードが序文はラドクリフ＝ブラウンに書いてもらうべきだと勧めてくれたのだ、と明かしている (ibid.)。実際、エヴァンス＝プリチャードはシュリニヴァスを高く評価するとともに、たいへん気に入っていたようである。それは、この後に出てくる、シュリニヴァスがオックスフォード大学に就職するにあたってのエピソードにも表れている。

<sup>18</sup> シュリニヴァスは構造機能主義に対する自身の見解を次のように述べている。「…私は制度間の相互依存という構造機能主義 (の考え方) を受け入れ、そのような相互依存 (という考え方をを用いること) によって、人類学者は『社会システム』について語るができるということを受け入れた。そして私は社会システムを、社会的現象を理解し、よりうまく説明することを可能にする発見的／学習的手段としてのみ受け入れたのである」(Srinivas 1997: 14、二重引用符は原著)。

<sup>19</sup> シュリニヴァスが提唱した「サンスクリット化」はインドに関する社会人類学・文化人類学研究において「最も多く引用され、応用され、批判され、議論された概念」(Konale and Bhat 2007: 115)と言われている。また人類学以外でも、社会学、歴史学、政治学、言語学、サンスクリット学、インド学など、多くの分野で幅広く議論されてきている (Shah 2007[2005]: 130)。シュリニヴァス自身も長年にわたって「サンスクリット化」概念を論じ、検討し続けた。シュリニヴァスが最初に「サンスクリット化」を論じたのは『南インド・クルグ人の宗教と社会』(Srinivas 1952)であるが、彼の最初の著作である『マイソールにおける結婚と家族』においても、後に「サンスクリット化」として概念化される現象について言及している (Srinivas 1942: 111-112)。1967年の論文で、シュリニヴァスは「サンスクリット化」を、低位のカーストや部族ないしその他の集団が、上位のカーストの習慣、儀礼、信仰、イデオロギーや生活様式を取り入れていく過程と定義し、集団のサンスクリット化は、通常、その地域でのカーストのヒエラルヒー内の地位を上げる効果をもたらすと述べている (Srinivas 2002[1967]: 222)。

<sup>20</sup> シュリニヴァスにとって、サンスクリット化概念は分析のための手段であった。彼は「インド社会を分析する手段としてのサンスクリット化の有用性は、この概念のゆるやかさのみならずその複雑さのために非常に限定されることになる」と述べたうえで (Srinivas 1956: 482)、サンスクリット化をもっと単純で均

スは、その理論や概念が正しいかどうかということよりも、それを用いることによって、どれだけ、社会や現象について説明ができるか、理解が深まるかということを重視している。

ラドクリフ＝ブラウンとエヴァンス＝プリチャードの指導を受けて 1947 年に提出された博士論文は、1952 年に『南インド・クルグ人の宗教と社会 (*Religion and Society among the Coorgs of South India*)』という本として出版された。構造機能主義に批判的なエヴァンス＝プリチャードは、シュリニヴァスが博士論文を本として出版するにあたって、書き直しをすることを勧めたが、シュリニヴァスは博士論文執筆で力を使い果たしたので書き直す余力はないと答えた。エヴァンス＝プリチャードは、それを受け入れ、そのままの形で出版することを認めた (Fuller 1999: 5)<sup>21</sup>。豊かな民族誌的データを構造機能主義的枠組みを用いて検討し、社会と宗教の相互関係について分析したこの本により、シュリニヴァスはインド研究において一躍その名を知られるようになった。この本の影響が大きかったため、しばしば、シュリニヴァスは構造機能主義者であると言われているが、シュリニヴァス自身は、社会システムや制度間の相互関係についての説明を可能にするという構造機能主義の発見的／学習的価値を認めながらも、自分を構造機能主義者とは考えていなかった。それどころか、シュリニヴァスは構造機能主義者<sup>22</sup>と言われることに激しく反発し、彼の研究を貶めようとする人びとが自分に「構造機能主義者」というラベルを貼るのだとよく言っていたそうである (Shah 2000a: 100)。

1947 年 7 月、オックスフォードでの博士課程を終えてインドに帰国しようとしていたシュリニヴァスは、エヴァンス＝プリチャードから、彼のためにオックスフォード大学にインド社会学講師の職を設けたいが受けるつもりはあるかと尋ねられた (Srinivas 1973: 143-144)<sup>23</sup>。帰国するつもりでいたシュリニヴァスは喜びながらも当惑し、明確な返事をしないまま、8 月にインドに帰国した。その年 11 月の半ば、彼のもとにエヴァンス＝プリチャードから手紙が届いた。

---

質化されたいくつかの概念に分解するための方法として、サンスクリット文化の歴史を書くこと、そしてその際にはサンスクリット文化に包摂された異なる価値体系を明らかにし、地域偏差を詳しく叙述することに留意するよう指摘している。それができたのち、同じ文化に属する地域の異なるサンスクリット化の事例を比較し、それをさらにインド全体が含まれるような比較研究に範囲を広げていくことを提言した後、シュリニヴァスは以下のように締めくくっている。「(このようなアプローチは) 完璧主義者は気に入らないかもしれない。しかし完璧主義というのは往々にして結果を生み出さないことのカムフラージュなのである」 (Srinivas 1956: 496)。

<sup>21</sup> さらに、エヴァンス＝プリチャードは匿名でこの本に好意的な書評 (*Times Literary Supplement*, September 6, 1952) を寄せた。

<sup>22</sup> 原文では 'functionalist' (機能主義者) となっているが、ここでは 'structural-functionalism' (構造機能主義者) という意味で使われている。前者はしばしば後者の略語として用いられる。

<sup>23</sup> シュリニヴァスの別の自伝的論文では、若干異なる説明がされている。帰国予定の数週間前に、エヴァンス＝プリチャードから、オックスフォードを訪問中のラドクリフ＝ブラウンがシュリニヴァスに会いたがっているのを訪ねるように言われ、行ってみるとそこにはエヴァンス＝プリチャードも同席していた。ラドクリフ＝ブラウンは、エヴァンス＝プリチャードがシュリニヴァスのために講師の職を設けよう計画していることを彼に話し、もう何年かオックスフォードに残るよう強く勧めた (Srinivas 1997: 11-12)。

その手紙には、シュリニヴァスが1948年1月1日付けでインド社会学の講師に任命されたこと、さらに、就任後の最初の1年間はインドの村落調査に出てよいということが書かれていた。エヴァンス＝プリチャードは以前にシュリニヴァスがマルチ・カースト村の参与観察を行ないたいと話していたことを覚えていたのである。シュリニヴァスはこの寛大な申し出を喜んで受け入れた (Srinivas 1997: 12)。

シュリニヴァスは1947年の12月から調査対象とする村を選び始めた。彼の言葉によると「センチメンタルな理由から」(Srinivas 1976: 6) 南部マイソール地域のいずれかの村にすることに決め、最終的に、マイソール市から東南に約22マイル離れたランプラ (Rampura)<sup>24</sup> という村でフィールドワークを行なうことにした。ランプラに決めたのは、その村がシュリニヴァスに居住場所を提供してくれる唯一の村だったという実際的な事情もあったが (Srinivas 2000: 165)、シュリニヴァスは、ランプラという選択は「客観的な条件ではなく、感覚的な (aesthetic) 衝動に基づく」ものだったとも述べている (Srinivas 2000: 166)<sup>25</sup>。村人の勧めにしたがって、1948年1月30日に暗殺されたガンジーの喪が明けるまで調査の開始を延ばしたため、シュリニヴァスが村に移り住んだのは1948年2月中旬となった (Srinivas 1976: 10)。シュリニヴァスはランプラで同年11月末まで調査を行なった。

ランプラでのフィールドワークはシュリニヴァスにとって非常に印象深いものであり、かつ、その後の彼の研究にも大きな影響を与えたようである。彼は、後年、あるセミナーで「もし、どこで教育を受けたのかと聞かれたら、マイソール、ボンベイ、オックスフォード、そしてランプラで、と答える」と語っていたという (Nataraj 2007: 28)。ただ、このフィールドワークの期間、シュリニヴァスは4、5週間ごとに2、3日の割合で定期的にマイソール市に戻っていた。お金を補充したり、買い物をしたりする必要があったことも事実だが、根をつめたフィールドワークやプライバシーのない村の生活は4、5週間が限度で、息抜きをする必要があったと、シュリニヴァスは率直に認めている。村の友人がマイソール市にいるシュリニヴァスを訪ねたがると、彼はあらゆる種類の嘘をついてそれを拒んだが、そのため常に罪悪感に苛まれていた (Srinivas 1976: 32-33)。

ランプラでの調査に基づく民族誌は、調査から28年後の1976年になって『忘れ得ぬ村 (*The Remembered Village*)』という題で出版されることになる。この民族誌を執筆するに当たって、シュリニヴァスは時間をかけて整理したフィールド・ノートを放火によって失うという災難に

<sup>24</sup> ランプラは仮名で、ほんとうの名前はコダグハハリ (Kodagahalli) である (Mukhopadhyay 2007: 167)。

<sup>25</sup> ランプラは、シュリニヴァスの3～4世代前の先祖がタミルナドゥから移り住んだ村であるアラケレ (Arakere) からわずか3マイルしか離れていなかった (Mukhopadhyay 2007: 176)。

見舞われるのだが、それについては後でもう少し詳しく述べることにする。

1949年1月中旬、シュリニヴァスはオックスフォードに戻り、インド社会学の講師として教鞭をとった。当時のオックスフォードの社会人類学コースの大学院生には、エヴァンス＝プリチャードがケンブリッジからオックスフォードに移る際に一緒に移ってきたゴドフリー・リーンハート (Godfrey Lienhardt)、エムリス・ピーターズ (Emrys Peters)、デヴィッド・ポコック (David Pocock) が、学部生にはメアリー・ダグラス (Mary Douglas)、ジャック・グディ (Jack Goody)、ジョン・ミドルトン (John Middleton) がいた (Srinivas 1997: 12)。彼らはいずれも後に英国社会人類学をリードする研究者となる錚錚たるメンバーだった。オックスフォードでシュリニヴァスに与えられた教育の負担はそれほど大きいものではなく、研究の時間が十分に確保されていたし、同僚との関係も良好であった。何より長であるエヴァンス＝プリチャードに、シュリニヴァスはたいへん気に入られていた。だが、シュリニヴァスは、オックスフォードでの恵まれた環境に満足する一方で、インドに帰りたいという思いも捨てきれずにいた (Srinivas 2002[1983]: 693)。そんなシュリニヴァスに、インドのグジャラート州にあるバローダ大学に新設された社会学部の教授職<sup>26</sup> のオファーがあり、シュリニバスはそれを受けることにした<sup>27</sup>。前述のように、声をかけてくれたのは、バローダ大学の副総長補佐で、シュリニヴァスがマイソール大学の社会哲学のオナーズ・コースの学生だった時に教えを受けたワーディアであった。こうして、1951年6月、シュリニヴァスはオックスフォードを去り、バローダに赴任した。

バローダでの1年目は、オックスフォードとのあまりの研究環境の差にたびたび打ちひしがれることもあったが (Srinivas 1973: 144)、シュリニヴァスは、徐々に、活発な教育・研究活動を行なう学部を作るにはどうすればいいかを学んでいった (Srinivas 1997: 15)。さらに、シュリニヴァスは、社会学と社会人類学の有機的な統合を目指して力を注いだ。彼の努力は実を結び、わずか数年のうちに、バローダ大学の社会学部は一流の教育・研究機関として評価されるようになった。

バローダでのシュリニヴァスについては、彼の自伝的論文 (Srinivas 2002[1981]) やバローダ

---

<sup>26</sup> 当時の英国やインドでは学部教授はひとりだけであり、教授になるということはその学部の長となることを意味した。

<sup>27</sup> 後のインタビューで、シュリニヴァスは、インドに戻る決心をした理由として、インドで自分ができることをしなくてはならないという思いや、インドにいる親族とのつながり、今戻らないと戻る機会を失ってしまうという危機感もあったが、英国の陰鬱な天候に耐えられなかったということも直接的な理由のひとつだと語っている (Deshpande 2000: 108)。前述のクールグでの調査に関するエピソードからもうかがえるように、気候というものがシュリニヴァスに与える影響は大きかったようである。

でシュリニヴァスの最初の学生となったシャー (A.M. Shah) の追悼論文 (Shah 2007) に詳しく書かれている。1959年初めに、当時デリー大学の副総長だった高名な経済学者 V.K.R.V.ラオ (V.K.R.V. Rao) に請われて、デリー大学に新設される社会学部の教授に就任するためバローダを去るまでの8年弱のバローダでの日々は、公私ともに充実したものであったようである。シュリニヴァスは、後に、バローダにおいて新しく学部を創設するとはどういうことかを経験し、それが次のデリー大学で非常に役に立ったと振り返っている (Srinivas 2002[1981]: 622)。学部運営に忙しく、自分自身の研究にあまり時間を割くことができなかつたものの、1952年にはに2ヶ月半にわたる2度目のランプラ調査を行なっている。また、マドラスから来た地理学者ルクミニ (Rukmini) と結婚して長女ラクシュミー (Lakshmi) が生まれたのも、バローダ時代のことであった (Shah 2007: 56)<sup>28</sup>。

1959年にデリー大学に移ったシュリニヴァスはバローダでの経験を生かして、社会学部の新設に取り組んだ。その結果、創設からわずか10年たらずで、デリー大学の社会学部は政府の大学助成金委員会 (the University Grand Commission) から社会学高等研究センター (Centre of Advanced Study in Sociology) の認定を受け、多額の資金が得られるようになった。シュリニバスはこの資金を他大学からの研究者の招聘、学生のための奨学金設置、図書館の充実などに用いて、学部をさらに拡充した (Srinivas 1997: 15)。

シュリニヴァスは、デリーでも、学部運営や学内外の委員会の仕事で多忙だったが、1964～1965年と1969～1970年の2度にわたって、米国スタンフォード大学の行動科学高等研究センター (CASBS Center for Advanced Study for the Behavioral Sciences) に客員フェローとして滞在中、自分の研究に集中することができた。しかし、この2度目の滞在中、シュリニヴァスはわずか1週間足らずのうちに、母の死、そして、18年の時間をかけて整理してまとめたランプラ調査のフィールド・ノート3冊を失うという不幸に立て続けに見舞われた。1970年4月20日、シュリニヴァスはマイソールにいる母が他界したという知らせを受けとり、一時帰国することを考えていた (Srinivas 2002[1983]: 694)。ところがその数日後の24日、彼の研究室が入っていたセンターの建物が放火に遭い、フィールド・ノートのほとんどが焼失してしまったのである。1951年に英国からインドに帰国して以来、2つの大学における社会学部の創設・運営で多忙を極め、1948年に行なったランプラの調査結果を民族誌にまとめる時間が取れなかつたシュリニヴァスが、在外研究期間を利用して民族誌の執筆に取りかかろうとしていた矢先のことだった。(Srinivas 1976: xiii; 2000: 163)。

幸い、フィールド日誌と整理前のフィールド・ノートの原本はデリーにあったので無事だっ

<sup>28</sup> シュリニヴァスの子どもにはラクシュミーの他に次女トゥルシー (Tulasi) がいる。

だが、18年かけて整理し、まとめたフィールド・ノートを失ったシュリニヴァスにとって、また一からその作業をやり直すということは考えるのも耐え難いことだった。当時やはりスタンフォードに滞在していた米国人人類学者のタックス (Sol Tax) は、執筆を諦めようとしていたシュリニヴァスを励まし、記憶に基づいてランプラの民族誌を執筆するように勧めた。タックスに勇気づけられたシュリニヴァスは記憶に基づく民族誌の執筆に取り組み<sup>29</sup>、ディクタフォン (速記用口述録音機) を使って、約6ヶ月の間に100,000語以上を録音した。1971年の2月にはウィルス性肝炎に感染して非常に危険な状態に陥ったが、九死に一生を得て、夏から執筆を再開した。後述するように、1972年5月からバンガロールで新しい研究所の設立に関わることになったために執筆のペースは落ちたが、原稿は1975年に完成し、シュリニヴァスは1976年に『忘れ得ぬ村 (*The Remembered Village*)』を上梓した (Srinivas 1976: xiv-xv; 1978: 136)。大半が記憶に基づいて書かれた民族誌は大きな反響を呼び賛否両論が寄せられたが<sup>30</sup>、小説のような味わいにあふれたこの本がシュリニヴァスの著作のなかで最も有名な本になったことは間違いない。

1972年5月、再びV.K.R.V.ラオから、彼と一緒にバンガロールに社会経済変化研究所 (ISEC Institute for Social and Economic Change) を設立しようという誘いを受けたシュリニヴァスはデリーを去り、バンガロールに移った。1979年にISECを退職した後は、バンガロールの国立高等研究所 (NIAS National Institute for Advanced Studies) にJ.R.D.タタ客員教授 (J.R.D. Tata Visiting Professor) として加わり、1999年11月30日に急性肺炎で逝去するまでここに在籍していた (Madan 2001: 119)。

1951年にオックスフォードからインドに帰国して以来、3つの学術機関 (M.S.バローダ大学社会学部、デリー大学社会学部、ISEC) の創設に関わったほか、インド社会学会会長 (1968 - 1970) をはじめ数々の委員会の委員を務め、多忙を極めたシュリニヴァスだったが、その合間を縫って、カースト制、インドの村落コミュニティ、インドの近代化や社会変化、宗教、ジェンダー、社会学・社会人類学とその方法論などに関して数々の著書、編著書、論文を残した。そして、これらの著書や論文を通して、「サンスクリット化 Sanskritization」「ドミナント・カースト dominant caste」「垂直的 (カースト内) 紐帯と水平的 (カースト間) 紐帯 vertical (inter-caste)

<sup>29</sup> 整理前のフィールド・ノートの原本と燃え残った部分との突き合わせや、焼失した記録を復元する専門家や他の人々の協力があって、焼失したフィールド・ノートのかなりの部分は復元されたが (Srinivas 1976: xiii)、記憶に基づいた民族誌を書くことを決心したシュリニヴァスはどうしても必要なとき以外はノートを見ないことにし、大部分を記憶に基づいて執筆した (Srinivas 2000: 165)。

<sup>30</sup> 例えば1978年に発行された *Contributions to Indian Sociology* 第12巻第4号は、1号分すべてがこの本の書評論文12本とそれらに対するシュリニヴァスのリプライ (Srinivas 1978) に充てられている。

and horizontal (intra-caste) solidarities」 「ヴォートバンク votebank」 といった概念を発表し、インドのみならず、他の地域を研究対象とする研究者にも影響を及ぼした。前述の、1996年に発刊シュリニヴァスの経歴と業績に関する論文集には、彼の出版物がほぼ網羅されている文献目録が収録されている (Shah et al. eds. 1996: 219-226)。

また、シュリニヴァスは他界する数ヶ月前から、それまでにあちこちで発表した論文や記事のうち40本余りを選んでまとめた論文集の出版計画を進めていた<sup>31</sup>。結局、彼はその論文集の完成を見ることができず、また、執筆を予定していたイントロダクションも書くことができなかったのだが、この論文集は彼の死後、2002年にニューデリーのオックスフォード大学出版局から発行された (Srinivas 2002)。この1冊でシュリニヴァスの主要な論文のほとんどを読むことができるので、興味のある方は手にとっていただきたいと思う。

## おわりに

ほとんどの学者は研究・教育・組織運営という異なる3つの領域に多かれ少なかれ携わることになるが、このいずれの領域においても優れている、いわゆる三拍子揃った学者はそう多くはない。シュリニヴァスの生涯をたどると、彼がそうした数少ない学者のひとりであったことがわかる。教育者としてのシュリニヴァスについて前項では言及しなかったが、パロード大学で彼の学生となり、後に同僚となったシャーは「シュリニヴァスは学生に対して最善を尽くした。彼は学生が提出したすべての学位論文の草稿の一語一語に目を通して、細心の注意を払ってコメントをつけた。彼のコメントは内容に関してだけでなく、言葉遣いの問題にまで及んだ」と述べている (Shah 2000a: 97)。組織運営については、シュリニヴァスは嫌いであると明言し (Srinivas 1973: 145)、自分は基本的には教師であり研究者であるので、組織運営で時間を無駄にするべきではないという思いに常に悩まされてきた、と述べている (Srinivas 2002[1983]: 694)。しかし、シュリニヴァスはその嫌いな組織運営においても並々ならぬ手腕をもっていたことは、彼が3つの学術機関を立ち上げて、いずれも成功させたことから明らかである。

彼の学者としての生涯のなかで最も大きな分水嶺となったのは、オックスフォード大学での職を辞してインドに帰国するという選択をしたことだろう。シュリニヴァスも「オックスフォードを去って自分の国の大学に戻ったのは正しかったのだということについては何の疑いも持っていない。ただ、オックスフォードに残っていれば、もっと厳正な学者になり、もっと多くの本や論文を書いていただろうということはわかりすぎるほどわかっている。しかし、そうしていたならば私は感情的・精神的に枯渇してしまい、それが私が関わった人々との関係のみなら

---

<sup>31</sup> 未発表の論文1本も含まれている。



ず私の仕事にも影響しただろうということも、また確かなのである」と述べている (Srinivas 1973: 144-145)。そして、故国に戻ることによって得ることができた達成感のなかでもっとも大切なもののひとつとして、インドで教育を受けた学者たちを創り出すことに助力できたことを挙げている (Srinivas 1973: 145)。組織運営においても長けているということは、必ずしも研究者としてのシュリニヴァスが望んだことではなかったことかもしれないが、そのおかげでインドに近代社会学・社会人類学が根付いたと言えるだろう。

シュリニヴァスの学者としての生涯は全体的に見れば名誉と成功に彩られているが、その一方でマイソール大学のオナーズ・コースの最終試験で優等が取れなかったり、ボンベイ大学の社会学部講師の人事選考に漏れたり、18年間かけて整理したフィールド・ノートを一瞬で失ったりと、当初の予定や希望通りにはならなかったこともあった。しかし、オナーズ・コースの最終試験で優等が取れなかったため、役人になるのをあきらめてボンベイ大学大学院に進学して社会学を学ぶことになり、ボンベイ大学社会学部講師の人事選考に漏れたため、オックスフォード大学に留学することになり、フィールド・ノートを失ったために、記憶に基づいて民族誌を書き上げるという実験的な試みを図らずも行なうことになった。このような経験を経てきたシュリニヴァスが自分の人生を振り返って述べた言葉を引用して、結びとしたい。

私が人生から学んだのは、もし計画を立てなくてはならないならば立てる、ただし、それは、慎重に練り上げた計画もだめになることがしょっちゅうだということをよく心得えたいうえで、ということだ。そして、計画がだめになってしまった時は、たとえそれですべてが失われてしまったかのように見えたとしても、そんな風には考えないこと。もしかしたら、それがもっと何かずっとよいことになるのかもしれないのだから (Srinivas 2002[1983]: 695)。

## References

- Deshpande, Satish 2000. 'M.N. Srinivas on Sociology and Social Change in India: Extracts from an Interview.' *Contribution to Indian Sociology* (n.s.) 34(1): 105-117.
- Evans-Pritchard, E.E. 1940. *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*. Oxford: Clarendon Press.
- \_\_\_\_\_ 1962[1950]. 'Social Anthropology: Past and Present,' in E.E. Evans-Pritchard, *Essays in Social Anthropology*, pp. 13-28. London: Faber & Faber. First published in *Man* 50(198).

- Fuller, Chris 1999. 'An Interview with M.N. Srinivas.' *Anthropology Today* 15(5): 4-10.
- Jain, Ravindra Kumar 2007. 'Professor M.N. Srinivas and His Monograph *The Remembered Village: A Critical Assessment*,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 77-89. Jaipur: Rawat.
- Konale, S.B. and H.K. Bhat 2007. 'Religion and Society among the Coorgs of South India: Some Conceptual and Methodological Issues,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 113-128. Jaipur: Rawat.
- Madan, T.N. 2001. 'M.N. Srinivas, 1916-1999.' *International Sociology* 16(1): 115-121.
- Misra, P.K. 2007a. 'Preface,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 13-23. Jaipur: Rawat.
- \_\_\_\_\_ 2007b. 'Reading M.N. Srinivas as an Ethnographer,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 91-102. Jaipur: Rawat.
- Misra, P.K., K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.) 2007. *M.N. Srinivas: The Man and His Work*. Jaipur: Rawat.
- Mukhopadhyay, Rajatubhra 2007. 'Srinivas and Village Studies: A Look into His Approach and Method,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 167-181. Jaipur: Rawat.
- Nataraj, V.K. 2007. 'On M.N. Srinivas,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp.25-34. Jaipur: Rawat.
- Naville-Rolfe, S. 1942. 'Marriage Customs in the Making: *Marriage and Family in Mysore* by M.N. Srinivas.' *Nature* 3809: 505.
- Panini, M.N. 2007. 'Srinivas and Participant Observation,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp.103-112. Jaipur: Rawat.
- Shah, A.M. 2000a. 'In Memory of M.N. Srinivas.' *Contributions to Indian Sociology* (n.s.) 34(1): 93-104.
- \_\_\_\_\_ 2000b. 'An Interview with M.N. Srinivas.' *Current Anthropology* 41(4): 629-636.
- \_\_\_\_\_ 2007. 'M.N. Srinivas in Baroda,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 41-61. Jaipur: Rawat.
- \_\_\_\_\_ 2007[2005]. 'Sanskritization Revisited,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 129-145. Jaipur: Rawat. First published in *Sociological Bulletin: Journal of the Indian Sociological Society* 54(2).
- Shah, A.M., Baviskar, B.S. and Ramaswamy, E.A. (eds.) 1996. *Social Structure and Change*, Vol. 1,

- Theory and Method: Evaluation of the Work of M.N. Srinivas*. New Delhi: Sage.
- Singh, K.S. 2007. 'Remembering M.N. Srinivas,' in P.K. Misra, K.K. Basa, and H.K. Bhat (eds.), *M.N. Srinivas: The Man and His Work*, pp. 35-39. Jaipur: Rawat.
- Srinivas, M.N. 1942. *Marriage and Family in Mysore*. Bombay: New Book.
- \_\_\_\_\_ 1952. *Religion and Society among the Coorgs of South India*. Oxford: Clarendon Press.
- \_\_\_\_\_ 1956. 'A Note on Sanskritization and Westernization.' *Far Eastern Quarterly* 15(4): 481-496.
- \_\_\_\_\_ 1973. 'Itineraries of an Indian Social Anthropologist.' *International Social Science Journal* 25: 129-148.
- \_\_\_\_\_ 1976. *The Remembered Village*. Berkeley: University of California Press.
- \_\_\_\_\_ 1978. 'The Remembered Village: Reply to Criticisms.' *Contributions to Indian Sociology* 12(4): 127-152.
- \_\_\_\_\_ 1995. 'Sociology in Delhi,' in Dharma Kumar and Dilip Mookherjee (eds.), *D. School: Reflections on the Delhi School of Economics*, pp. 31-52. Delhi: Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_ 1997. 'Practicing Social Anthropology in India.' *Annual Review of Anthropology* 26: 1-24.
- \_\_\_\_\_ 2000. 'Ex igni renascimur: The Remembered Village and Some Thoughts on Memory Ethnography.' *Current Anthropology* 41(2): 163-168.
- \_\_\_\_\_ 2002. *Collected Essays*. New Delhi: Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_ 2002[1967]. 'The Cohesive Role of Sanskritization,' in M.N. Srinivas, *Collected Essays*, pp. 221-235. New Delhi: Oxford University Press. First published in P. Mason (ed.), *India and Ceylon: Unity and Diversity*. London: Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_ 2002[1981]. 'My Baroda Days,' in M.N. Srinivas, *Collected Essays*, pp. 609-622. New Delhi: Oxford University Press. First published in *Journal of the Maharaja Sayajirao University of Baroda* 30.
- \_\_\_\_\_ 2002[1983]. 'All is not Lost if Your Plans Go Away,' in M.N. Srinivas, *Collected Essays*, pp. 689-695. New Delhi: Oxford University Press. First published in *Deccan Herald*, December, 1983.
- Times Literary Supplement*, September 6, 1952.